



庄内町 / 立谷沢川

平野を潤す清流の里 立谷沢



Cradle 5

「キレイなつかしい、日本をのせて。」
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2021 May/June
令和3年5月1日発行(隔月奇数月発行)第11巻9号(通巻89号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0236 (64) 0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コア・コミュニケーションズ] 電話0234(41)0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
松ヶ岡開墾
150年
庄内憧憬
轡田隆史
ジャーナリスト

「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

5
2021 May/June
TAKE FREE
NO.65



旧庄内藩士たちによる松ヶ岡開墾の苦難の歴史に
 こころ揺さぶられ、大蚕室の窓から望む月山の裾野の、
 大地の崇高な傾きに陶醉した。

心眼のふるさと

轡田隆史

桜の花びらが舞う中で、いまは
 亡き「大殿様」酒井忠明さんに教
 えられたのは「はるかだのう」と
 という雅びやかな言葉だった。

しばらくご無沙汰だった友に久
 しぶりに会ったとき、あふれるよ
 うな懐かしさ、うれしさをこめて
 「はるかだのう」と語りかけたもの
 だと、微笑みながら話してくだ
 さった。

「酔眼耄碌翁」を自称する今と
 なっては、さまざまな記憶は茫々
 の彼方であるけれど、「大殿様」が、
 おおらかな口調で語ったその言葉
 と、松ヶ岡開墾場に^{いづか}を連ねる大
 蚕室の威容は、僕の精神の奥に
 しっかりと位置を占めて鮮明である。
 初めて松ヶ岡を歩いたのは、三
 十年ほど昔、現役の新聞論説委
 員のころだった。大歌人、馬場あ
 き子さんに連れられて、古式を伝
 える「黒川能」詣でに熱中したの
 がはじまりだったのか、あるいは

わが「不良仲間」である随筆家下
 重暁子、大野弘義夫妻の誘いだっ
 たのか。

いずれにしても、旧庄内藩士た
 ちによる松ヶ岡開墾の苦難の歴史
 にこころ揺さぶられ、大蚕室の窓
 から望む月山の裾野の、大地の崇
 高な傾きに陶醉したのがはじまり
 だった。

「大殿様」や「若殿様」酒井忠久・
 天美夫妻の、歴史と伝統と文化を
 守り育てるこころざしの深さが、
 こころ貧しいぼくの精神に手をさ
 しのべてくれたのだった。

そのご縁で、酒田の本間家のみ
 なさんともお近づきになることが
 できた。松ヶ岡から出立して、庄
 内各地の歴史や文化やこころある
 人びとに接するようになっていった。

二十年ほど昔、山形テレビの番
 組『おくの細道』（斉藤斉ダイレク
 ター）に女優の渡辺えりさんとと
 もに出演したぼくは、松尾芭蕉に

扮して月山の頂上に立ったとき、
 松ヶ岡の蚕室群が見えるかしら、
 と期待したけれど雲にさえぎられ
 てむなしかった。

しかし、「酔眼耄碌翁」となった
 いまなら「はるかだのう」とそつ
 と唱えさえすれば、たちどころに
 「松ヶ岡開墾場」を、心のうちに見
 ることができる。

「地霊」や「言霊」の存在を信ずる
 からこそ研ぎ澄まされる「心眼」で
 あり「心願」であり「神願」なのだ
 と妄想している。

「はるかだのう」には「言霊」が、
 「松ヶ岡」には「地霊」が、宿って
 いる。松ヶ岡蚕室の甍は、ぼくの
 精神の奥にも、古武士の風格その
 ままに聳^{そび}えているのだ。



国指定史跡「松ヶ岡開墾場」の四番蚕室

くつわだ・たかふみ/ジャーナリスト。1936年東
 京生まれ。浦和高校時代サッカーで全国優勝と回、早
 稲田大学蹴球部全盛時代を築く。朝日新聞記者として
 ロンドンなどに駐在。論説委員を経てテレビ・コメン
 テーターに。テレビ朝日「ニュースステーション」で
 「夜校中継」も。日本記者クラブ、日本ペンクラブ
 (監事)、日本エッセイスト・クラブ、日本山岳会(会
 員)、ボート伝統文化振興財団評議員。主な著書に『考え
 る力』をつける本、『100歳まで読書』(三笠書房)、
 『酔眼耄碌翁のたわごと』(出版芸術社)、『心に効く
 い人生をつくる11行の話』(PHP研究所)、『小論文
 に強くなる』(岩波書店)など。

「松ヶ岡開墾場は徳義を本とし、産業を興して国家に報じ、以て天下に模範たらんとす」

「気節凌霜天地知の箴は、我が松ヶ岡の精神なり」(大正15年制定「松ヶ岡開墾場綱領」より)

開墾の精神が示されている松ヶ岡開墾場綱領は、
開墾55年目に制定されて以来、松ヶ岡で今なお大切にされています。
旧藩士たちが原生林の開墾に挑んで150年。
幾度の困難を乗り越えたその^{つよ}強い精神と志は、松ヶ岡のみならず、
庄内に生きる私たちの中にも受け継がれている気がします。

特集 松ヶ岡 開墾150年

【企画協力】
鶴岡「サムライゆかりのシルク」推進協議会

【取材協力・写真提供】
松ヶ岡開墾場、公益財団法人致道博物館、鶴岡市、松ヶ岡産業株式会社、
山形県立鶴岡工業高等学校、株式会社エル・サン

【参考資料】
加藤省一郎著「臥牛 菅実秀」(致道博物館 1966年発行)
「松ヶ岡開墾百年記念写真帖」(松ヶ岡開墾場 1972年発行)
武山省三編著「凌霜史 松ヶ岡開墾場百二十年のあゆみ」(松ヶ岡開墾場 1997年発行)
「図説 鶴岡のあゆみ」(鶴岡市 2011年発行)
石川光也著「地域の宝 松岡ものがたり—裏方の記—」(2017年発行)

特集
松ヶ岡
開墾150年

現存する5棟の大蚕室がある松ヶ岡開墾場。屋根には今も酒井家のかたばみ紋が入った鶴ヶ岡城の瓦が使われている。



しかし明治9年、庄内一円で起きたワツパ騒動で酒田県からの開墾事業補助金が打ち切りとなり、明治10年には心の拠りどころだった西郷隆盛が西南戦争で自刃。明治11年には

たのだと思います。西郷隆盛の勧めでドイツ留学に行っていた旧庄内藩主・酒井忠篤ただすみの存在も大きく、忠篤は帰国後の明治政府での活躍の道を約束されていましたから、開墾士たちの希望の星だったでしょう」と話します。

以後、大きな織物工場がいくつも生まれ、職人を育成する学校や織機をつくる鉄工所も生まれるなど地域を挙げた産業クラスターが形成されまし

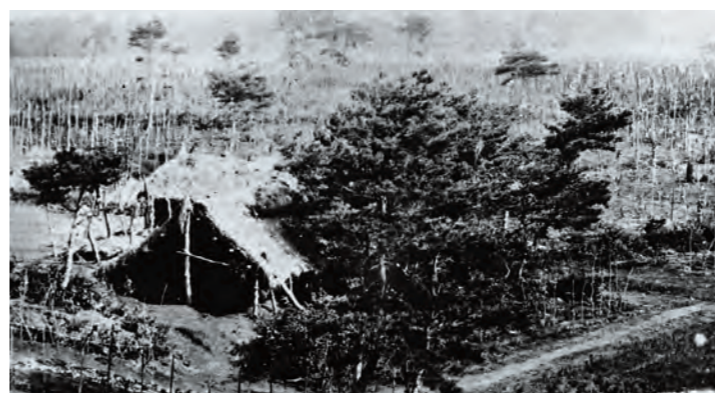
一円に養蚕が定着した明治20年、鶴岡に松岡製糸所を開設

難を乗り越えた開墾場は、それでも続く資金不足から蚕室の稼働率を下げ、桑を売却するなど規模を小さくしながら事業を継続。やがて養蚕再興への情熱と蚕種の需要増加によって、次第に事業を盛り返していきます。そして庄内

酒井 忠久さん

松ヶ岡開墾場第4代総長。旧庄内藩主酒井家18代当主、公益財団法人致道博物館代表理事・館長、公益財団法人日本美術刀剣保存協会会長。

た。こうして鶴岡は国内屈指の絹織物産地として、明治・大正の近代化を歩み始めたのです。
※気節凌霜天地知／どんな困難でも霜を凌ぐほどの強い心で取り組めば、天地は見て、必ず応えてくれるという意味。



311ヘクタールの開墾地には、明治6年から桑の苗が植えられ、桑畑が広がった。



明治5年の開墾士たち。鶴ヶ岡城下から毎日通い、轟音と共に巨木を倒す様は、まるで戦場のようだったそう。

松ヶ岡開墾場 150年のはじまり

庄内の近代化を推し進めた絹織物産業。その発端となった松ヶ岡の開墾には幾多の困難があり、開墾士たちは西郷隆盛から贈られた「きせつりょうそうてんちしる気節凌霜天地知」の箴言しんげんを支えに、乗り越えてきたといわれています。開墾から絹織物産業が庄内に定着するまでの軌跡を追いました。

明治5年8月早朝。旧庄内藩士3千人が刀を鋏に替え、鶴ヶ岡城から列を組んで8キロほどの道のりを歩いて向かったのは、月山麓に広がる後田山の原生林（現松ヶ岡）。その日から開墾士として29組に分かれ、巨木を倒し、巨大な根を掘り起こし、雑木を刈って地面をならす重労働を、雨の日も風の日も続けました。2年で開墾した地は約311ヘクタール。明治6年には桑の栽培を始め、翌年には養蚕の先進地である島村（現群馬県伊勢崎市境島村）へ研修に赴き、学んできたノウハウで大蚕室の建造に着手。完成した蚕室で養蚕、蚕種製糸を開始し、明治10年には蚕室が

10棟に。5年前まで原生林だった地は、一面の桑畑に日本一大きな蚕室群が建ち並ぶ景色に一変しました。明治初期に旧庄内藩が進められた松ヶ岡開墾事業。旧藩主酒井家18代の酒井忠久さんは、その背景に「戊辰戦争に敗れ、明治維新が進んでいる先行きの見えな時代」に備え、人材を温存する」という幹部の思惑がありながらも、「当時の重要な輸出品だった生糸の産業を興して国に貢献することで、戊辰戦争で着せられた賊名を払拭しよう」という強い志が一人一人にあったから、ここまで成し遂げられたのだと思います。西郷隆盛の勧めでドイツ留学に行っていた旧庄内藩主・酒井忠篤ただすみの存在も大きく、忠篤は帰国後の明治政府での活躍の道を約束されていましたから、開墾士たちの希望の星だったでしょう」と話します。



堀 誠さん

松ヶ岡開墾場理事長。桜が満開の開墾場にて開墾場綱領について語る堀誠さん。20年以上開墾場の理事を務め、平成30年度に理事長に就任。

特集 松ヶ岡 開墾150年



毎年、開墾記念日当日に行われる早朝作業。日の昇らないうちから鶴ヶ岡城を出発して開墾に向かった当時をしのび、中学生以上の男性が集まってたき火を焚き、本陣の雪囲いを取り、周囲の整備作業を行う。

松ヶ岡に受け継がれる 開墾の精神

養蚕業を通じて国益に資するという志が途絶えそうになりつつも15年近い月日をかけて実を結び始めた松ヶ岡の開墾事業。
一方、開墾士たちはひと段落するとそれぞれの道を歩み始め、うち30人ほどが家族を伴って松ヶ岡に居住を始めました。開墾場を中心にした集落の形成です。

開墾士たちの松ヶ岡への居住は桑園や蚕室の管理を兼ねて明治8年末頃から始まり、明治11年には32戸となりました。居住者は松平親懐を初代総長とした「松ヶ岡開墾場」の場員となり、蚕室で蚕種製造、製糸といった開墾場事業に携わり、桑畑で野菜を育て、生活を営み始めます。こうした背景のもとに続いてきたのが「土地の共有制」です。松ヶ岡開墾場理事長の堀誠さんは「共有地制は、3千人がお国のために耕した土地を、みんなで守っていきましょうという考えから生まれたものです。そのため私たちは、3千人の開墾地を預

論語などを学んでいました。開墾場からも仕事を終えた夜に歩いて通っていました。昭和10年代に開墾場内に「教学部」が立ち上がって本陣で勉強会を開始。現在は「教学委員会」として開墾記念式や山仕舞などの伝統行事を主管し、少年会や青年研修会、教養講座などを企画しながら、開墾の歴史や精神を伝えています。「ただ私が思うに、150年の歴史の中では消長というものも確かにあったと思うのです」と話すのは、

山田陽介さん。歴史の要素を所で作られてきた松岡村誓約書、同志者誓約書、松ヶ岡開墾場綱領などは、いずれもその時代に住民意識を新たにすることを必要が生じたからではといえます。「開墾場最大の危機ともいえる敗戦の時もそうでした。だからこそ、時の開墾場幹部が日本農工学校校長で宮城に隠棲していた菅原兵治先生を招き、先生が昭和21年に東北農家研究所（現東北振興研修

所）を松ヶ岡に創立したのです。先生の教えは全国から集まった農村青年だけでなく、開墾場の人々にも大きな影響を与え、共に学ぶ中で松ヶ岡としての精神が息を吹き返したのだと思います。」

そして開墾から150年が経ち、54戸の住民が暮らす今年、堀誠さんは開墾の意義をあらためて見つめ直す年にしたいといっています。「開墾以来、先人たちが大切にしてきたのは、開墾場綱領に示されている『気節凌霜天地知』の精神です。私たちも歴史の重みを自分のものにして、多様性も理解しながら、明るい未来になるように、その精神をつないでいきたいと思っています」。山田さんも話します。「今の若い世代はこの地の歴史が他にはないことに気づき、私たちの頃よりも意識的に歴史をつなげようとしています。とても頼もしいことです」。今年の開墾記念日には、旗「松風萬古」を新しい布地に染め抜き、掲揚しました。松ヶ岡には今も開墾当時と変わらず清風が吹き渡っています。



毎年4月7日に開催される松ヶ岡開墾記念式。祭壇に菅原秀、西郷隆盛、酒井忠篤の肖像画や写真が飾られ、酒井忠久開墾場総長と松ヶ岡地区の住民が参列し、松ヶ岡開墾場綱領を唱和する。



山田陽介さんの自宅に飾られている西郷隆盛の肖像画。松ヶ岡の多くの家庭に同様の肖像画が飾られ、敬愛されている。

開墾150年の記念に、今年新しく作られたのぼり。開墾80年にあたる昭和26年に、菅原兵治から贈られた旗の複製で、「松風萬古」には松ヶ岡を吹き渡る風が永遠であるようにという願いが込められている。



明治初期、蚕室の中では女工さんたちが原蚕を飼育し、種繭を生産していた。



深みのある光沢、美しいドレープ、一枚のシルク生地は、養蚕、製糸、製織、精練、捺染という工程によって作り出されます。これら全工程を有する一大絹産地となった庄内では、この新産業の発展が地域の多分野に影響し、近代化を大きく押し進めました。

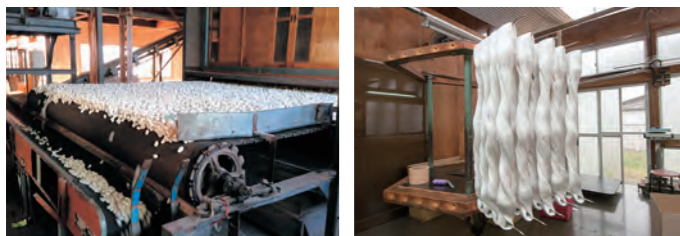
松ヶ岡発 鶴岡、絹織物の 歩む道

糸ができて、織りが始まり、精練へとぶどうの房（クラスター）のように産業が集積し、一時は鶴岡の就業人口の約6割が絹織物産業に従事するなど、一大絹産地へと発展します。明治から大正にかけて日本は蚕糸の生産国となり、生糸や絹織物、蚕種など、蚕糸業は海外輸出の花形産業に。海外からはより質の高い生糸が求められるようになりました。明治20年に大宝寺村新斎部（現鶴岡市新海町）に創業した松岡製糸所では、富岡製糸所をはじめ先進地の繰糸技術を学び、松岡蚕種や庄内蚕が求められるようになりました。業学校などと連携しながら「松岡姫」など原料繭の改良を図りました。そして明治28年、洋装用の「羽二重」を輸出向けに開発。さらに明治31年、旧藤島町の斎藤外市が力織機を発明し、のちに特許を取得。その革新的な製織技術はたちまち国内に普及します。その後、海外で人気を博していた縹子織りの生産も始まり、鶴岡には力織機を造る鉄工所が続々と創業、鶴岡染織学校（現鶴岡工業高校の前身）が創立して工業教育が発達するなど、絹織物産業は地域の多方面に影響を与えました。

特集 松ヶ岡 開墾150年

酒田市松山地区にある松岡(株)では、国産の繭のみを原料に使用。生繭を乾燥させ、熱湯で煮た後で、糸の端を引き出す。現在、機械製糸を行う企業等は国内に松岡(株)と他1社のみ。

大正2年、松岡製糸所は松嶺町（現酒田市松山地区）に分工場を設立、昭和12年に生産拠点を松嶺に集約させます。その頃、欧米では人絹（レーヨン）の開発が進み、世界経済は不況期に突入、戦争により多くの企業が廃業を余儀なくされました。「戦後、数社が集まって鶴岡織物工業協同組合が発足しましたが、絹産業は中国に押されて厳しい状況に陥りました」と話すのは、松嶺分工場を前身とする松岡株式会社代表取締役社長、清野力さん。同社ではその技術力を生かした航空機の部品製造などを並行して業務を維持してきま



した。しかしコロナ禍で国産の絹織物産業は今、危機的な状況となっています。「松ヶ岡から始まった事業はスクラップ&ビルドを繰り返してきました。事業の形を変えながらも絹の産業を誰かが続けてきたのは、歴史を伝える文化的な資産だからです」。歴史を語るだけのものではなく「生きる資産」として未来へつないでいくために、松岡(株)をはじめとする絹織物産業は新たな活路を目指し始めました。絹の機能性を生かし、食品利用として水溶液を商品化したほか、手術の縫合糸、漢方薬など、医療分野での研究も進められています。また、鶴岡市が平成11年に開催した慶應義塾大学とのTTCCK構想地域振興調査ワークショップを機に、鶴岡の絹を取り巻く環境は全国で唯一であるとして、地域おこしを目的とした絹織物産業の文化価値の創造への取り組みが始まります。平成14年度から20年度までは「鶴岡シルクサミット」を隔年で開催。平成23年頃から「シルクタウンプロジェクト」へと発展し、幼児や小学生の蚕の飼育体験、温海地区の旧福栄小学校での養蚕や、鶴岡中央高校のシルクガールズプロジェクトなど、世代を問わず、絹の文化を継承していく動きが活発化しています。



松岡(株)では、伊勢神宮の式年遷宮に生糸を奉納。最上級の糸質の絹糸は、糸の織度が均一で、使用する繭の量も決められている。機械と人の目によって日本の絹の高品質を維持している。

明治28年に鶴岡染織学校が創立。その後、変遷を繰り返しながらも地域の実業教育を担い、現在の県立鶴岡工業高校へと歴史が続いている。



早坂 剛さん

株式会社エル・サン代表取締役会長。農業生産法人「エルサンワイナリー松ヶ岡」を設立、代表取締役社長を務める。平成29年から松ヶ岡でのワイン醸造用ぶどう栽培を開始。令和2年10月、醸造所にレストラン、ショップを併設した「ピノ・コッリーナ ファームガーデン&ワイナリー松ヶ岡」をオープン。

特集 松ヶ岡 開墾150年



松ヶ岡開墾場の直営店「kibiso ショップ」ではテキスタイルデザイナー須藤玲子さんがデザインを手がけた商品が多く並ぶ。

シルク&ワイン 松ヶ岡の 未来へ続く物語

日本の絹産地の北限であり、一連の製造工程がそろう、明治期にしてそれら産業クラスターが形成されたこと。その貴重な地域遺産は、この地の人々が築き上げたものです。「人の和をもって成す」酒井家17代当主、酒井忠明氏が遺した言葉は、今、そして未来の松ヶ岡で新たな和を広げようとしています。

て社会は、今後はサステナブル(持続可能)、エシカル(倫理的)へと変化し、その点でシルクは土にかえる素材として有用です。ここからビジネスを生み出すために、異業種、産官学、世代間が連携し、それぞれの強みを生かして、世のため人のためになるアイデアを形にしていこう。みんなで作る」という庄内藩の教学、祖徠学の教えを過去から学ぶことで、未来は見えてくると思っています。

この動きに先駆けて昨年、松ヶ岡にワイナリーがオープンしました。経営は株式会社エル・サン。新事業

開墾士の末裔たちが継承してきた、松ヶ岡の有形・無形の資産。そこから花開いた庄内の絹織物産業。それらの歴史的・文化的価値が評価され、平成29年、開墾場などを構成文化財として日本遺産「サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景」に出会うまち鶴岡へ」に認定されました。

これを受けて鶴岡市では鶴岡「サムライゆかりのシルク」推進協議会を発足、アドバイザーに東北芸術工科大学学長の中山ダイスケさんを迎え、「松ヶ岡クラフトパーク構想」へと乗り出しました。「ここをクリエ

イターが集う場所に」

と話すのは、同協議会に参画する鶴岡シルク株式会社代表取締役の大和匡輔さん。その実現に向け、来春を目指して蚕室などのリニューアルが始まっています。大きく変わるのは四番蚕室。絹織物産業の歴史・現在・未来を知る展示スペースを設け、糸をつむぐ、染めるなどの体験を通してシルクにふれる場をつくりたい。kibiso ショップでは、今後は生地の販売も行う予定だそう。松ヶ岡でクリエイターたちが生地から製品をつくり、有名

への参入を決めるきっかけになったのはこの地の風景だったと松ヶ岡ワイナリー代表取締役社長、早坂剛さんは話します。

「イタリアの世界遺産ランゲ地方のぶどう畑とアルプスの風景が、松ヶ岡と月山の風景と重なりました。開墾の精神が息づく地域の原点ともいえる松ヶ岡を、未来に残していきたいという想いを抱



国産ぶどう・国内製造による日本ワインを醸造。この4月にはロゼワイン「Frou Frou」がデビュー。「ふるふる」はフランス語で絹擦れの音の意味。5月頃には白ワインが発売予定。

いたんです」。早坂さんらの想いに對し、松ヶ岡の人々は快く畑を貸し、苗木も入手して栽培を開始しました。「我々は素人集団ですから『学』の力を借りなければできない」と、山田農学部、鶴岡高専、慶應先端研などの協力を得て土壌の調査やぶどう品種の解析などを行い、昨年からの醸造がスタートしました。「松ヶ岡のストーリーは唯一無二。ここで造られるワインも同じもの一つとしてなく、アートのようだと思っています。地域のワイン文化をつくり、地域に貢献することが私の未来への願いです」。

桑からぶどうへ、松ヶ岡の物語に「第二の開墾」ともいえる新たなページが加えられました。



県内17カ所目のワイナリー「ピノ・コッリーナ ファームガーデン&ワイナリー松ヶ岡」。店名はイタリア語でピノは「松」、コッリーナは「岡」。



大和 匡輔さん

鶴岡シルク株式会社代表取締役。平成22年に同社を設立し、「kibiso」ブランドを立ち上げる。kibiso=きびそは蚕が最初に吐き出す糸で、織物には不向きとされていたが、ナチュラルな風合いを生かして商品化を実現した。鶴岡織物工業協同組合理事。

メーカーなどともタイアップして、未来志向の産業を創造・発信する場所に。それができるのは、絹製品のサプライチェーンを有する地域だからこそ実現可能だと、大和さんは言います。「量産と流行による使い捨



鶴岡シルクの シルクインナーマスク

不織布マスクによる肌荒れや
二重マスクの息苦しさに
困っている人に朗報です!
国産シルク100%の二重マスク専用
インナーマスクが登場しました

純白のなめらかな光沢感が美しいシルクのインナーマスク。両脇のレース部分に不織布マスクを通して装着すれば、シルクのつけ心地、不織布マスクの機能性、レースによるエレガントなアクセントの三拍子がそろった二重マスクの完成だ。

手がけているのは鶴岡シルク株式会社。1年ほど前にダブルガーゼをシルクで挟んだマスクを発売し、大きな反響を得た。だが今年に入って不織布マスクの機能性の高さが発表されると、二重マスク人口が増加。今回の新マスク開発は、その中で肌荒れに悩む声が増えたことが契機となった。まず肌が触れる内側にはシルクの中で最も肌に優しいサテンを用いた。張りつきや息苦しさを軽減するために、真ん中に接着芯を縫い付けて立体構造に。またアイロン不要のシワになりにくいシルク生地を外側に用い、ダブルガーゼを省いて軽量かつ通気性を実現。耳への負担もなくそうと、不織布マスクを挟むだけのスタイルを独自に考案した。そうしてこの3月に「肌荒れから守るマスク」として試験的に発売を始めると、またもや予想以上の反響が。肌荒れに悩む人の多さはもとより、150年の歴史に裏付けられた鶴岡シルクの質の良さ、困っている人を助けたいと考えぬいたそのアイデア、職人による丁寧な仕立てなども、手にする人の心に響いているのであろう。

プラスチックゴミが世界的な問題となっている中で、それでも感染症から命を守るものとして時代に求められている石油素材の不織布マスク。なんと皮肉な状況だが、せめて天然素材のシルクマスクよ、私たちのお肌を守っておくれ。



現在、オンラインショップで販売しているのは3種類(右写真上、左写真右と真ん中)。松ヶ岡開墾場ショップでは、小顔効果のあるマスク(右写真下)と男性用も限定販売中。サイズは全種類フリー。あらゆる不織布マスクのサイズに対応可。

オンラインショップ [kibiso SHOP]

<https://www.t-silk.co.jp/>

クレードルショップ [iino]

<https://cradleshop-iino.com/>

鶴岡シルク株式会社 ☎0235-29-1607

(平日9:00~18:00)

(取材・文 長谷川結)



梅林公園の梅

種浸す 湯田川温泉を歩く

大雪だった冬の後の春は
のんびりやって来ると油断していた。
気付いたら猛烈なスタートダッシュで
駆け抜けようとしている。
春の朝日に誘われ、一斉に咲き出す
花たちに会いに出かけた。

季語
種浸し
(たねひたし)
発芽を促すため、稲の
種もみを水や温水など
に浸しておくこと。

春光をゆらす風あり水面あり

—とりうみかづき

湯田川温泉の開湯は今からおよそ1300年前の和銅5(712)年、温泉で傷を癒やしていた白鷺を見て発見されたという。温泉街のちょうど真ん中にある黒瓦屋根の「正面湯」の前に立つと、その先の正面に見える由豆佐賣神社に向かって一礼する人がいることに気付く。ここで暮らす人たちにとって、毎日お湯

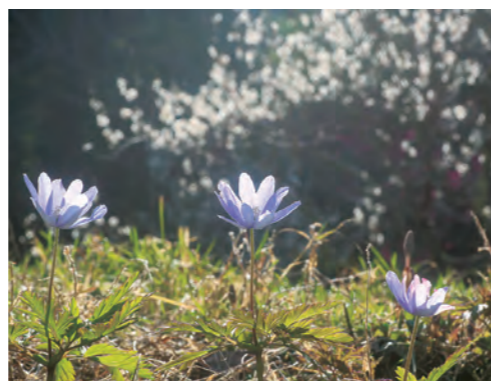


由豆佐賣神社と乳イチョウ

梅であることを忘るる白さとも

—祐森水香

温泉街の奥に位置する梅林公園に向かうと、入り口で菊咲一華きくざいいちげが一斉に朝日に向かって開いていた。待ち焦がれていた春は駆け足で過ぎていく。次々と春の花々が咲き、白梅は春光に舞う雪のように、紅梅は竹林に差し色を与えていた。広い公園に一頭の小さな蝶がどこからともなく現れた。とその時、鶯の声が響く。梅の枝の間から、遠く鳥海山を望んだ。



菊咲一華

神の湯の息吹きもらひて種浸す

—あべ小萩

神社の鳥居をくぐると、その先に苔むした石段と杉並木が続き、参道の脇に大井多右衛門の石碑があった。石段を登ると、右に樹齢1000年といわれる県指定天然記念物の乳イチョウの巨木がそびえ立つ。現在の本殿は、旧西田川郡役所などを手掛けた庄内の名棟梁、高橋兼吉によって明治15(1882)年に建築されたものである。参道の脇の竹林では「竹の秋」を迎えていた。



種浸し

鳥海山の裾野ははるか春淡し

—灘穂浪

慌ただしく過ぎる毎日でも、少し早起きして出かけてみたり、車から降りてゆっくりと歩いてみるだけで、見える景色が違ってくる。足元に見えるものにも愛おしさを感じる。
湯田川温泉を訪れたら、お湯をいただく前に由豆佐賣神社を参り、湯の神に手を合わせてみるのも良い。梅の頃を過ぎ桜の花が終わると、湯田川は孟宗の季節を迎える。



湯田川温泉の通り